

テーマ「不妊」

～男性にも増えている不妊。決して特別なことじゃない～

パート	内容
オープニング	<p>あなたは「不妊」にどのようなイメージをもっていますか？</p> <p>結婚したら、子どもができて、家族に囲まれ幸せに。。。</p> <p>これは、誰にでも訪れる未来ではありません。</p> <p>今や日本では、6組に1組のカップルが不妊の問題で悩んでいるのです。</p>
ストーリー1	<p>佐藤きよ子です。現在36歳で、不妊治療3年目です。20代は男性に負けまいと、一生懸命仕事に打ち込んできました。30代に入って、仕事も落ち着いてきた頃に、ご縁があつて結婚しました。当時は「結婚すれば子どもはできる」、と思い込んでいたのです。しかし、結婚して4年経っても子どもを授かることができず、不安や焦りがでてきました。周りから「子どもは？」、と聞かれる度に、「まだ夫婦2人の生活を楽しまたいの」、と言って本当の気持ちを隠していましたが、なんともやりきれない日々でした。</p> <p>やっとの思いで病院の門を叩きましたが、不妊の原因はわからずじまい。仕事と治療の両立は、時間のやりくりが大変で、年齢も気になってきたので、頑張っていた仕事を、泣く泣く辞めました。そして不妊治療に専念したのですが、何度治療を繰り返しても、未だ授かることのできない日々……。誰にも不妊の悩みを話すことが出来ず、自然と家に閉じこもりがちになりました。3年も続けている不妊治療費も100万円以上に嵩み、金銭的にも精神的にも、苦しい毎日を過ごしています。スーパーに行っても、子ども連れや、ベビーカーを押しているお母さんが眩しくて、治療がダメだった日には、涙がこらえきれず、どこに行っても何をしても、「妊娠」が頭から離れません。</p>
ストーリー2	<p>鈴木翼です。現在37歳の会社員です。同じ年の妻とは、4年前に結婚しました。仕事も結婚生活も落ち着き、2年程前から子どもが欲しい、と思い始めましたが、一向に子どもが出来ませんでした。初めは、妻が病院に行って、検査を受けたのですが、特に原因となるものは、見つかりませんでした。そこで、旦那様も検査を、と言われて、まさかと思いながら、何気なく自分も受けた所、男性不妊と診断されました。</p> <p>男性としての生殖能力に問題があることなど、これまで一度も考えたことがなく、周りにもそのような例はなかったので、愕然としました。男性としての存在を、全否定された気がし、目の前が真っ暗になりました。親や友人にはもちろん、誰にも相談できない辛い日々。仕事にも力が入らず、かといって治療にも打ち込めない日々。妻にも申し訳なくなり、どう接していかわからなくなってしまいました。</p>

<p>社会の現状の説明</p>	<p>佐藤きよ子さんや、鈴木翼さんのように、不妊症に悩むカップルは今や日本で6組に1組といわれ、何らかの不妊治療を受けている人は現在50万人近いと推測されています。不妊の問題は、決して少数の人の特殊な問題ではないのです。また、不妊と言うと、女性だけの問題、と見なされがちですが、精子減少症や、精子無力症などの、男性不妊も決して少なくありません。世界保健機関の調査によると、不妊の原因は、男性のみが24%、女性のみが41%、男女ともが24%、原因不明が11%となっています。不妊は男女問わず、身近な問題となりつつあるのです。</p> <p>そんな中、自分たちの不妊体験が、誰かの役に立つのなら。誰にも届いていない声を、届ける団体を作ろう！」と、不妊当事者による自助団体、NPO法人Fineが、2004年に設立されました。</p>
<p>課題に取り組むNPOの紹介</p>	<p>NPO法人Fine・理事の松本です。Fineでは主に、正しい不妊の知識やイベントなどの情報の発信、不妊体験者同士のコミュニケーションの場の提供、しっかりとした、不妊と心理の、知識とスキルを持つ、ピア・カウンセラーの養成。その認定者によるカウンセリングなど、不妊体験者が本当に求めているものを提供しようと、日々活動しています。設立のきっかけは「声を届けたかったから」。私自身が、不妊に悩んでいる時に、不妊に関するインターネットの掲示板と出会いました。何年かそこで交流していく中で、あることに気が付いたんです。</p> <p>「不妊の悩みは、変わらない」。お盆やお正月には帰省の話題が出ます。「いやだなあ、親戚のおせっかいなおばさんから、また『まだ子供作らないの？いつまでも若いと思ってちゃだめよ早く作りなさいよ』って言われちゃう。帰りたくないな」。たとえばお正月。かわいい赤ちゃんの写真付きの年賀状が届いたりします。そうすると「うちにはいつこんなにかわいい赤ちゃんが来てくれるんだろう。こんなに頑張ってるのに」と、お正月から悲しくなります。また、母の日や父の日は、テレビのコマーシャルを見るのもつらくなったり・・・でも、一番つらいのは、そんな気持ちになってしまう自分を好きになれないことなんです。書き込む人は変わっているのに、悩みは何年もずっと同じ。“この季節になったらこの話題”になることに気が付いた私は、「どうしてなんだろう」と不思議に思いました。そして、気が付いたんです「ああ、ここは不妊の人以外は見てくれていないんだ」 私たちはインターネットに書き込むことで社会に提言しているつもりだったけど、この声は、どこにも届いていなかった。だったら「声を届けよう」と思ったのです。私たち一人一人の声は小さくて、どこにも届かないかもしれません。でも、集まったら？一人より10人、10人より100人、もしかして1000人、集まったら？もしかしたら、声が届くところが増えるかもしれない。そうしたら、何か少しだけ変わるかもしれない。だから、団体を作って、声を届けよう、と思ったのです。そして、2004年にFineを設立しました。</p> <p>現在では、芸能人や政治家の不妊治療が、マスコミなどでも取り上げられ、少しずつ、「不</p>

	<p>妊)や「不妊治療」の認知度は上がってきています。でも、まだまだ、不妊はネガティブなイメージがあり、「特別視」されることが多いです。そのためか、治療中は「不妊治療をしている」ことを、堂々と公言できていた方でも、子どもを授かると、そのほとんどが「不妊治療をしていた」ことを隠すようになります。その理由は「治療で授かったことで、子どもがいじめや差別を受けたら困るから」です。残念なことに、そのような(差別や偏見の)事実もあるのが、日本の現状です。</p> <p>今や不妊は、世界的に深刻な問題となっています。まずは社会で多くの人に、この問題を身近な事実として、正しく理解して欲しいと思っています。</p>
<p>プロジェクトに参加したプロボノワーカーの声</p>	<p>Fineさんのウェブサイトリニューアルのプロボノプロジェクトに携わったプロボノワーカーからのメッセージです。「私は、このプロジェクトに関わるまでは、全く不妊の問題について考えたことはありませんでした。しかし、Fineさん主催のカウンセリング講座に参加した際に、多くの女性が不妊に悩まれているを知りました。そして、「子供が出来ない」というプレッシャーから鬱にまで発展してしまうこと、ご兄弟にも相談できないケースもあることから、当人にとって非常に重く、デリケートな問題であると気づきました。</p> <p>このような深刻な問題である不妊治療について、時々「そんなに辛いなら治療を止めればいい」という意見も聞きます。しかし、それは誤解であると思います。精神的、肉体的、そして金銭的にも辛い不妊治療をなぜ続けられているか。それは、周囲の偏見や、様々な精神的・肉体的・金銭的負担を乗り越えても、ご本人がどうしても子供を欲しいという強い思いを持ってらっしゃるからです。ですから、そのような方が安心して治療を続けられるような環境を整備すべきだと思います。そのような環境整備に向けて、男性視点から何が出来るかを考えました。</p> <p>私の答えは不妊治療に協力的であること、奥様を精神的にサポートしてあげることの2つです。おそらく、初め不妊治療を開始すべきか悩むのは奥様です。よって、旦那様には是非検査に協力的であって欲しいと思います。、そして親戚・姑さんなどからのプレッシャーから彼女を守ってあげて下さい。彼女の悩みを聞いてあげて下さい。もし男性側に不妊の原因があった場合には、積極的に治療に協力してあげて下さい。それが、奥様の不安を解消するきっかけにもなります。今回のプロボノ活動を機に、不妊治療に関する様々な問題を知ることが出来ました。是非会場の皆さんにも、これを機に不妊治療について考えて頂ければと思います。</p>
<p>NPOの今後のチャレンジ</p>	<p>日本は不妊治療大国と言われています。数年前は10組に1組でしたが、今や6組に1組が、治療や検査を受けています。このように、日々、身近な問題となっていく「不妊」の問題。特に不妊治療には、精神的・身体的・時間的な負担がのしかかるため、佐藤きよ子さんのように、仕事と両立できずに、やめざるを得なくなる人も多くいます。</p> <p>Fineが2010年に行ったアンケートでは、仕事と治療の両立が難しく、退職や休職をした人</p>

	<p>が 40%にものぼりました。企業の中には、高島屋さんやキャノンさんのように「不妊治療休暇」という取り組みを始めてくださっているところもありますが、まだごく少数で、残念ながら、大きな広がりを見せていません。不妊治療のために退職が増えることは、30代・40代の、大事な戦力を失うことにもつながりますので、企業にとっても損失であるという声も多きかれます。さらに、不妊当事者にとっては、いくつもの大きな負担がのしかかっています。</p> <p>中でも深刻なのは金銭的な負担です。Fine の調査では、約半数の 47.4%の方が、不妊治療費の総額が 100 万円を超えると回答しているのです。多くの治療費がかかってしまう不妊治療の中に、「体外受精」という方法があります。これは妻の卵子を体外に取り出し、夫の精子と受精させ、妻の子宮に受精卵を戻す方法です。一見とても特別なことに思えるかもしれない治療方法なのですが、実はすでに、体外受精によって誕生した子どもは、日本だけでも 2010 年で 27 万人を越え、その年の新生児の約 37 人に 1 人まで広がってきています。つまり、学校の 1 クラスの中に 1 人は、「体外受精」で生まれた子どもがいる計算になります。（体外受精だけではなく「人工授精」を入れると、もっともっと多くの子どもが「不妊治療」により、生まれてきています）この体外受精の成功率は決して高くないのですが、金額は、成功する、しないに関わらず、1 回で約 50 万円かかります。少子化が進み、この治療を行なう人の数が年々増えていることから、現在では国から助成金を出していただけるようになりました。しかしその条件がやや厳しく、せっかくの助成金を使える人は限られています。</p> <p>不妊対策は、日本の少子化対策のひとつであるとも言えると思います。そこで Fine では、この助成金の条件を緩和していただけるよう、5 年前から署名を集め国会請願を行なっています。このほか、性教育の改善なども求め、今後も積極的に国政への働きかけを行なう予定です。</p>
<p>最後のまとめ</p>	<p>決して特別なことではない「不妊」問題。この言葉自体がネガティブな「不」という文字を使っているのが、最近では、妊娠に向けて頑張っている、という意味で、「妊活」という言葉も広がってきています。カミングアウトしやすい社会を広めていくために、社会の理解が高まるのが、重要なのです。潜在的な、不妊当事者への意識付けも、必要です。女性の社会進出に伴い、晩婚化・晩産化が進んでいる現状ですが、年齢に伴い、妊娠・出産できなくなる確率も、高くなってしまいうことを、若いうちから、しっかりと理解していくことが重要です。日々の過ごし方、冷え対策、飲酒・喫煙の影響、そして検診の重要性、それらを高校生・大学生の年代の方々に伝えていくとともに、社会全体での意識を変えていくことが大切なのではないでしょうか。</p>

※冒頭部に出てくるストーリーは、事実に基づいたフィクションです。イベント当日に読み上げていただいた方とは、全く関係はありません。